

## シンポジウム資料

## 杜甫「為華州郭使君進滅殘寇形勢図状」について

高橋未来

## 【本文について】

肅宗乾元元年（758）六月、杜甫は宰相房琯を弁護したために華州司功參軍に左遷された。そして華州到着後の七月に、上司の郭刺史に代わって本篇を著したと考えられる。安慶緒は魏博節度使相州の鄴に反乱軍の拠点を築いていた。杜甫は本篇に安慶緒を討伐するための策を述べ、その情勢を記した図に本篇を添えて上疏した。史思明はこれより以前に安慶緒と袂を分かち、一時的にだが朝廷に従順な態度を示しており、本篇が書かれた後に再び朝廷に背くようになる。

## 【杜甫の策略】

鄴を囲むために、各地の將軍が①～⑤のルートの順に攻めていき、挟み撃ちにする。

- ①——平盧軍の董秦と許叔冀が魏州を攻略しにゆく
- ②——成徳軍と平盧軍の李銑・殷仲卿・孫青漢<sup>1</sup>が①軍を援助し、貝州・博州を攻略する
- ③——①②の攻撃により、相州・衛州の精鋭軍が魏州・博州の援助に来た場合は、朔方軍の郭子儀と伊西北庭軍の李嗣業<sup>2</sup>が相州・衛州を攻略する
- ④——賊軍が③軍に対して抗戦してきた場合は、郭口（昭義軍の王思礼）と祁県（河東軍の李光弼）の軍が昭義と魏博の境にある林慮県に駐屯する
- ⑤——以上の各軍の進行にあわせて、忠武軍の李広琛と義成軍の魯炆が黎陽・臨河を攻略する

朝廷軍が討伐のために結集したものの、進軍しないことへの批判も記されている。

## 【本篇の特徴】

## （1）杜甫の華州時代の状況を示す重要な資料

本篇は、杜甫が戦争の平定と国家の安定のために役立ちたいという意欲を募らせており、安慶緒の討伐を切実に願っていたことを示す資料である。谷口真由実氏は「華州司功參軍時代の杜甫—「乾元元年華州試進士策問五首」にみる問題意識—」<sup>3</sup>において、杜甫が「当時非常に切実な問題意識と具体的な政策を抱いて」おり、杜甫の策問には、疲弊する民衆にさらなる増税や貨幣鑄造を実施することへの反発と問題意識とが表出されていると指摘する。

「策問第一首」は、安史の乱の収束に至っていない今、増大してゆく軍事費に賦税を充てると人民を追い詰めるという問題を挙げている。これは本篇中に、朝廷軍が結集したままで進軍しないことに対して「大軍空しく転輸の粟に勤むべからず」と訴える意識と繋がっているのではないかと。さらに、松原朗氏は「杜甫の華州司功參軍時期についての覺書—併せて閻琦・王勳成の免官説の検討

<sup>1</sup> 不祥。

<sup>2</sup> 杜甫の知人である。

<sup>3</sup> 『杜甫の詩的葛藤と社会意識』（汲古書院、2013）所収。

一」<sup>4</sup>にて、「三吏三別」は杜甫が左拾遺を免官されてもなお「諫官の自覚」にとらわれていたことを示すものと指摘するが、本篇も諫官の意識を以て著されたと考えることができるだろう。

また左遷先の華州に到着後、一ヶ月のあいだにこのような策略の文を著していることから、杜甫がめげずに国家再建のために奮起し、さらには自身の朝廷復帰への願いも抱いていたことが窺えるのではないか。

## （２）安慶緒討伐のための具体的な戦略

・作成の過程はよく分からないが、杜甫の戦略の才能、地形を把握し地理に詳しい点などが発揮された力作で、実務家の能力も備えていたことが分かる。仇兆鰲は「杜公借箸前籌、洞悉情勢、此等文字、真可坐而言、起而行者、初非書生談兵迂闊也。与韓昌黎論淮西事宜、俱推經国有用之文（杜公の借箸前籌、情勢を洞悉す、此等の文字、真に坐して言い、起ちて行うべき者にして、初めて書生の兵を談ずること迂闊なるに非ざるなり。韓昌黎の淮西の事宜を論ずると与に、俱に經国有用の文を推す）」（『杜詩詳注』巻25）と賞賛した。

- ・相州の攻略という一番の大仕事は、郭子儀と杜甫の知人の李嗣業に委ねるとしている。
- ・本篇の上疏から二ヶ月後の九月には、実際にも、本篇に名が挙げられた將軍十一人のうち八人が安慶緒の討伐に当たって成果を上げた。

## （３）訳注を作る際に苦勞したこと

文中に出てくる地名はどこを指すのか

**郭口**——現在の山西省黎城県東陽関（むかしの壺口関。潞州にある）の東に位置するが、『中国歴史地図集』第五冊・隋唐五代十国時期（1982）では別の場所に記されていた。

**臨河**——『元和郡県図志』『中国歴史地図集』嚴耕望『唐代交通図考』等でも確認できるが、『杜甫全集校注』の注には誤記があり、現在の中国のどこに当たるのかが分からなかった。

## （４）杜甫の作品として

『文選』を除けば、『史記』、『左伝』、『書経』の引用が目立つ。文体は整っており冗長さが無い。韓愈「論淮西時宜状」のような長文ではなく、短い文の中にポイントが端的に示され、よく練られた文章である。

本篇の先行研究は非常に少ない。しかし、杜甫の作品としては注目されにくいこのような文を取り上げて分析する事により、詩のみでは見えてこなかった、杜甫の士大夫としての能力や処世態度、人物像などを深く掘り下げることにつながるのではないか。

---

<sup>4</sup> 『中国詩文論叢』（第30集、2011）所収。